

イザヤ書16章5節 「堅い恵みの王座」

1A 一つの王座

1B 一方的な恵み

2B 堅い土台

3B 約束の成就

4B 真実と正義

2A モアブの高ぶり

本文

私たちの聖書通読の学びは、14章まで来ましたが、今日は15-17章を読んでいきます。今朝は、16章5節に注目したいと思います。「**一つの王座が恵みによって堅く立てられ、さばきをなし、公正を求め、正義をすみやかに行なう者が、ダビデの天幕で、真実をもって、そこにすわる。**」

15章と16章は、主がモアブという国に対して語られた宣告、裁きの言葉です。モアブという国は、イスラエルの東、死海の東にある国でした。アブラハムの甥ロトとその娘の間に生まれた、近親婚によって生まれた子、アモンとモアブがいましたが、ですのでモアブはイスラエルと親戚の関係にあります。主は、モアブの地を通ってはならないと約束の地に向かうモーセたちに命じられ、兄弟なのだから敵対してはならない、争ってはならないと命じられました。けれども、モアブの王バラクは、まじない師バラムを雇ってイスラエルを呪わせようしました。イスラエルに敵対していましたが、けれどもダビデとは近い親戚になっていました。ルツがダビデの曾お祖母さんです。彼女がモアブ人であったけれども、あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です、と告白して、姑ナオミに付いていき、ベツレヘムでボアズとの間に子どもを生みました。ですから、ダビデがサウルから逃げていた時に、両親を一時期、モアブの王に預けていたぐらいです。

このようなことで、モアブはユダの国に敵対していながら、それでも決して遠くない関係にありました。したがって私たちの生きている世界に合わせるなら、「神を信じている人のそばにいる人々」ということができるかもしれません。クリスチャンに接しながら、神について、キリストについて話は聞いています。そのことについて気にはなるものの、今の自分の生活は変えないという立場を取っている人でしょう。

この預言が与えられたのは、おそらく紀元前704年ではないかと思われます。アッシリヤの王がエルサレムを包囲するけれども、神がその軍隊を一気に滅ぼされます。ですから、エルサレムに、シオンに、目に見えないけれども主が砦を作ってください、力強い王がおられることを証していました。ところが、モアブはイスラエルの神に頼ることなく、自分たちはこれまで攻められることがなかったので、安穩としていました。けれども、今、アッシリヤがヨルダン川の東にも攻め入っ

てきて、それでモアブの町々をことごとく滅ぼしていつている状態だ、ということです。

当時の政治状況、ユダやその周囲の国々の状況は、迫りくる大きな脅威、アッシリヤに対してどう対処するかということが至上命題でした。ユーフラテス川の上流にあるニネベを首都とする町、そこから一気に周囲の国々を征服していきます。征服した者たちは、残酷な方法で殺し、また奴隷としていきました。その一方で、南にはエジプトというもう一つに大国があります。ユダの周囲の国々は盛んに外交活動を繰り広げていました。エジプトの助けを借りながら、互いに同盟を組み、アッシリヤに対抗したのです。今で言う「集団的自衛権」を形成していきました。それで、反アッシリヤになるか、親アッシリヤになるかで、自分たちの生き残りの道を探ったのです。

しかし、イザヤがユダに対して語った言葉は、一貫していました。「主の前で静まりなさい。主は、シオンに礎を据えられました。主に拠り頼んで、この方を避難所としなさい。」と、反アッシリヤでも親アッシリヤでもなく、主ご自身に付きなさいと命じたのです。主ご自身を王とすることこそが、もっとも安全であり、安心する立場なのだよ、ということです。この世の国はあるけれども、神の国こそが勝利するのだというメッセージなのです。これはイエス様が、「神の国とその義をまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。(マタイ 6:33)」と言われた言葉と同じです。神とキリストを第一とする、主とする、そうすれば、そこにはイエス様の権威と力が広がっていきます。私たちが自分を弱くして、主の御霊が働かれるようにするならば、主が私たちにはできないことも、できるようにしてくださるのです。

私たちの生活には、「あちらを立てれば、こちらが立たず」というような状況がたくさんあります。仕事の状況、家族の状況、そして教会の中でさえ、あちらを立てればこちらが立たず、と二者選択で考えています。しかし、実はキリストを主としてあがめる中で、第三の道が開かれます。自分が思いつきもしない方法で、しかも自分の能力や知力をはるかに超えた形で、主ご自身が開いてくださる道です。そのためには、自分が幼い子どものように、自分ではなく主ご自身がこれらの難題に取り組んでくださると信じます。そうすれば、主が事を行ってくださいます。ダビデが詩篇で言いました。「131:1-2 主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。乳離れした子が母親の前にいるように、私のたましいは乳離れした子のように御前におります。」本文の、モアブに対するイザヤの言葉もこれと同じで、「一つの王座が堅く立てられている。ここに拠り頼みなさい、そうすれば救われる。」ということでもあります。

1A 一つの王座

1B 一方的な恵み

「**一つの王座が恵みによって堅く立てられ**」とイザヤは、モアブからの使者に対して言いました。アッシリヤによって逃げまどっているモアブ人が、使者を送ってきて、私たちが匿ってほしいと願ってきた時に、ユダに頼るのではなく、主なる神の王座のところに逃げてきなさい、と勧めています。

主はユダに対して、「鼻で息をする人間をたよりにするな。そんな者に何の値うちがあろうか。まことに、見よ、万軍の主、主は、エルサレムとユダから、ささえとたよりを除かれる。(2:22-3:1)」と言われていました。同じ言葉を、ここでモアブに対しても語っておられます。

以前、私たち夫婦が自分の家で聖書の学びをしていた時、トラクトを配って、ある若い男性が学びに集うようになりました。伝道したのですが、あまり興味は持っていないようです。相談があると仰いました。それは、失恋でした。どのようにすれば、よりを戻すことができるのか？という相談です。私は、よりを戻すべきか、それともあきらめるか、ということではなく、「まず、イエス様のところに来てみましょう。主が全ての計画を持っていますから。」と励ましました。彼は次の週から、学びに来なくなりました。とても残念ですね、何か自分の支えとなる人を探しているのですが、主こそが自分を支え、安定することができます。主は王座に着いておられることを知るので。

そして、この王座がどのような性質のものであるかを見たいと思います。「恵みによって」とあります。この恵みは、「ヘセド」という言葉です。この言葉は主が私たちが愛しておられ、けれども感情的に愛しているだけでなく、契約をもってとことん愛して下さった、ということです。つまり、愛している夫が結婚という誓約のゆえに愛し続けるような、「変わらぬ愛」のことです。主が私たちを支配してくださっています。主が王座におられます。しかし、それは私たちが神に対して真実であるから成り立っているのではなく、私たちが不真実でも神が真実であられるから成り立っています。神は恵みによって支配しておられるのであり、私たちが時に滑ってしまっても、失敗してしまっても、神は力強く、私たちを正し、そしてこれまでにない祝福をもって臨んでくださいます。

皆さんは、何かクリスチャンとしての生活に不足を感じていないでしょうか？祈りが足りない、伝道の努力が足りない、聖書をきちんと読んでいない。しかし、私たちがきちんとしているから主が働いておられるのではなく、主がきちんとご自身で約束したことを守っておられるから、神が”勝手に”私たちに好意を持っておられるから、良くしてくださるのです。パウロはテモテに、次の言葉を残しました。「次のことばは信頼すべきことばです。「2テモテ 2:11-13 もし私たちが、彼とともに死んだのなら、彼とともに生きるようになる。もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。」ですから、私たちの務めは神の真実を信じることです。自分でまとめあげて、動かないことです。主がすべての事を働かせて善としてくださることを信じるのです。そのことを信じて、期待して、それゆえに御霊の愛が私たちに注がれて、善を行なうことができます。

2B 堅い土台

そして、「一つの王座が..**強く立てられ**」いるとあります。モアブの王座は、とても気まぐれで、ぐらぐら動いていました。アッシリヤに対抗すべく、いろいろな策略を練って動くのですが、ある時は右に向いていたかと思うと、次に左を向いています。その政治情勢の中で、あっちに動き、こっち

に動いていたのです。しかし、主の王座は堅く立てられています。動じることはありません。ですから、キリストを主とし、王としてあがめているところには、決して揺るぐことのない御国が現れます。権威と力をもって現れます。

私たちは、何かをすることよりも、主の足元にひれ伏しているかどうかの方が大事になります。主の前に自分の意志や願い、思いを明け渡しているかどうか？です。そして、主が命じられたことを、自分の益になるのであれば行なう、そうでなければ行わないではなく、主が命じられたという理由だけで従う、ということです。このように、イエス様を主として王としてあがめ、自分を明け渡しているであれば、主がご自分の権威と力を、皆さんを通して表してください。主が、イスラエルの民を力強い御手によってエジプトから連れ出されましたが、そうした神の救いの実体が、新約聖書の中では、人の魂が救われ、病人が直り、悪霊が追い出されていく中で、また人々が罪を悔い改めて、正しい行いをしていく中で現れていました。こうしたことが、皆さんが神に服従している中で広がっていきます。その救いの広がりが、神の国の現れです。

主イエスを王としてあがめるということですが、先週、牧師たちの修養会がありました。修養会というよりも、静養会と呼んだほうがよいのではないかと思います。一人一人が、主にある安息が必要だったからです。主の足元にひれ伏すことで思い出すのは、ルカ 10 章 38 節から始まる、マルタとマリヤの話です。一人の牧師が、ここから御言葉を分かち合いましたが、39 節が自分の姿に当てはまりました。「彼女(マルタ)にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。」英語の聖書ですと、マリヤという妹もまた、主の足もとに座っていたというように書かれているそうです。つまり、マルタもマリヤも、主の足元に座って、御言葉に聞き入っていました。マリヤだけが御言葉に聞き入っていたのではなく、マルタも聞いていました。けれども、途中でマルタがそこから立ち上がって、いろいろなもてなしを始めました。そして、気が落ち着かず、「10:40 主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」と言っています。

イエスを主とし、王としているという姿勢を、マリヤは主の言葉に聞き入っていることによって示していました。しかし、マリヤはそこから離れてしまいました。その結果、主のために働いているつもりが、主の御心に反対するような心になってしまったのです。「何ともお思いにならないのですか」と言って、主がマルタを気にかけておられること、愛しておられることを疑っています。そして、マリヤを責めています。主からの励ましを受けなければいけない兄弟姉妹に対して、詰るのです。そして、ついに主ご自身に要求するようになってまです。イエス様を主と呼びながら、自分がイエス様に命令しているのです。主を王とすることとは、この方の御言葉に聞き入ることです。そして、自分の魂がその恵み深さに感動することです。そして、主の言われることなら何でも信じ、そして聞き従うことです。何か自分がしなければいけない、と思っははいけません。皆さんがしなければいけないのは、イエス様を王とすること、主とすることです。そこに安息があります。そして、「わたしのくびきは軽い」と言われた主のくびきから始まります。余計な重荷を負ってはいけません。

そして、この恵みによって強められると、私たちもまた不動の者となります。「1ペテロ 5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、強く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」苦しみを経て、それで強く立たせて強くし、不動の者としてくださいます。したがって、モアブのように苦しみを避ける者にならないでください。自分にとって不都合なことは避け、いつも自分の益になることを選び取っていく、日和見主義にならないでください。自分の霊的成長によって益になることを選び取ってください。たとえそれが自分には苦痛であっても、楽でなくても、選ぶ取るので。そうすれば、主が成長させてくださり、御国が強く立つように、自分も不動の者としてくださいます。

3B 約束の成就

次に「**ダビデの天幕**」という言葉に注目したいと思います。これはキリストが、ダビデの家に確かに着いて、御国を立ててくださるといふ約束であります。これは、ダビデにかつて主が約束して下さったことの実現です。ダビデは、自分は宮廷にいて、その杉でできた家に住みながら、神の箱が天幕の中にあることを友人であり、預言者のナタンに話しました。ナタンは「それは良い」と答えましたが、主が夜に彼に語られました。それは、わたしは家を造れと命じていない、ということが一点。しかし、わたしがあなたがたに一つの家を造る、と約束されたことがもう一点です。「2サムエル記 7:12-13 あなたの日数が満ち、あなたがあなたの先祖たちとともに眠るとき、わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子を、あなたのあとに起こし、彼の王国を確立させる。彼はわたしの名のために一つの家を建て、わたしはその王国の王座をとこしえまでも強く立てる。」この約束が実現する、ということです。

ここで、「ダビデの家」と書いていないで、「ダビデの天幕」と書いていることに注目してください。宮廷のような家ではなく、天幕です。これは、家であればもっと形式ばっていますが、天幕であればもっと親密で、本当に「家に戻ってきた」というような、ほっとした、個人的で、親密な意味が含まれています。それだけでなく、神の箱が安置されていた時の、神殿の装飾ではなく、ただ神の臨在を楽しんでいた時の簡素さを示しています。つまり、モアブからの使者に対して、「父なる神と親しく交わる方が、ダビデに神が約束されたように、ここに着座されるのだ。」ということです。

この方は、父なる神と親しい交わりを持ちながら、一對一の関わりを持ちながら、なおのこと御父から与えられた仕事をする、ということでもあります。12歳のイエス様は両親に対して、こう言われました。「わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。(ルカ 2:49)」主はご自分の父である神を、自分の家、天幕としながら、知恵を語っておられたのです。そして、主が再臨によって、エルサレムのダビデの座に着かれる時に、何ら違和感なく、そこをご自分の住まいとしながら世界を治めるようになる、ということです。そして主イエスは、この交わりを私たちにまで拡大してくださいました。「ヨハネ 14:23 だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住

みます。」イエス様が父なる神をご自分の住まいしているのと同じように、私たちは主イエス様を自分の住まいとして、その親しい交わりの中で物事に取り組みます。

4B 真実と正義

そして最後に、「**さばきをなし、公正を求め、正義をすみやかに行なう**」者が、ダビデの天幕に座るとあります。また、「**真実をもって**」座るともあります。つまり、神の国の正しさが、キリストによって広がるということです。私たちが主との親しみの中で生きる時に、その正しさが自分に周りで広がっていきます。「エペソ 4:22-24 その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、またあなたがたが心の霊において新しくされ、真理に基づく義と聖をもって神にかたどり造り出された、新しい人を身に着るべきことでした。」主の正義と聖さにしたがって、新しい人が用意されています。それを身につけることによって、その人の周りでは正義が広がります。嘘をついている所に、真実が広がります。憎しみや苦みのある所に、赦しが広がります。人から取り上げるところに、人に分け与える領域が広がります。御霊によってこれらのことをすることができます。

2A モアブの高ぶり

こうして、エルサレムにやって来た使者に対して、イザヤはまことの王に抛り頼み、望みをかけなさいと命じますが、モアブは応じません。「16:6 われわれはモアブの高ぶりを聞いた。彼は実に高慢だ。その誇りと高ぶりとおごり、その自慢話は正しくない。」と言っています。この高ぶりとは、いったい何なのでしょう？続けて読んでいくと、モアブにはぶどうがよく実る、豊かな高地であったことが分かります。そこに安穩と過ごしていた中で、「私は、イスラエルの神に頼らなくてもよい」と決めてしまったところに、高ぶりがあるということです。

このことが良く分かる預言が、エレミヤ書 48 章にあります。「48:11-12 モアブは若い時から安らかであった。彼はぶどう酒のかすの上にじっとたまっていて、器から器へあけられたこともなく、捕囚として連れて行かれたこともなかった。それゆえ、その味はそのまま残り、かおりも変わらなかった。「それゆえ、見よ、その日が来る。…主の御告げ。…その日、わたしは、彼に酒蔵の番人を送る。彼らはそれを器から移し、その器をあけ、そのつぼを砕く。」モアブは、何の変化もない生活の中で安穩としていましたが、それが、「ぶどう酒のかすの上にじっとたまって」いるということです。ぶどうは、それを酒にするために発酵させるとき、沈殿物が下に沈むようにしておきます。40 日経ってから、底に溜まっている滓を取り除くために、ぶどう酒をそっと他の容器に移します。もしこの容器に移す作業をしないと、ぶどう酒があまりにも甘くなり、台無しになってしまうからです。モアブは、以前から外敵による侵攻を受けていませんでした。それによって、安らかに暮らしていました。けれども、その安らかに暮らしていたのが自分たちをだめにして行っただけです。そこで神は、エレミヤを通して、バビロンを送られることによって彼らが無理やり他の器に移すと言われているのです。

日本という国は、モアブのように根底から揺るがされた経験がありません。他の国に侵略したこ

とはありこそすれ、侵略されたことはありません。ゆえに、安定して、とても快適な社会を築くことができます。しかし、それが高ぶりとなっています。自分はなぜ生きているのか、なぜ存在しているのか、死んだ後にどうなるのか、そんな永遠の命にかかわることに取り組む機会がありませんでした。あたかも、大豪邸に住む子供のような高ぶりがあります。守られて生きており、豊かにされており、それでなぜ自分が生きているのかという問い詰めが与えられないままで、ここまでやってきました。けれども、その安定が私たちの存在を蝕んでいます。生きる意味を分からなくさせています。何のために生きているのか分からないので、生きていることに喜びと感謝を抱けないのです。しかし、その安定が壊される時に、自分の環境が変わる時に、辛い思いをし、苦しいですが、その中で自分の生きていることを知る機会が与えられます。器から器へ動かされる時に、その動かされた自分に新しい神の御霊が注がれて、生きることができるのです。

神の国があるところには、聖霊の喜びと平安があります。しかし、神の国に入るためには、「心の貧しい者は幸いである、天の御国はその人のものである。」というイエス様の約束の通りに、自分には何もない、霊的に倒産してしまっているという悟りが必要です。しかし、その悟りがないと、モアブのように自分というものはしっかり持っていて、小手先の解決策だけで生きていくこととなります。自分を主なる神に明け渡しません。なぜなら、明け渡すと自分という領域が侵されるからです。自分のプライド、高ぶりがそれを許さないのです。そのために、モアブと同じように自分を持ったままで、生き残ろうとします。神のところに來ているようで、実は神を求めていない、神を利用しようとさえしています。これが偶像礼拝です。自分の願うように、自分の思うように神にしてもらおうとしますが、自分の思い通りにならなければいとも簡単にその神を捨てます。

しかし、ここでモアブの使者に語ったイザヤの言葉に目を向けてください。「**一つの王座が恵みによって堅く立てられ、さばきをなし、公正を求め、正義をすみやかに行なう者が、ダビデの天幕で、真実をもって、そこにすわる。**」神は恵みによって、あなたを支配してくださいます。そして、神は状況に拠って変わる方ではなく、いつまでも同じです。そして、主との親しい交わり、神を自分の住まいにしている中で、あなたの周りで御国が広がります。そして、神の義と聖にかたどり造られた新しい人を身に付けて、正義と聖さが広がります。ただ言葉だけの世界ではありません、権威のある言葉、力ある業を伴った世界です。